

生成 AI 使用における不適切な出力をテーマにした初年次教育の事例

白土由佳^{*1}
yuka@bunkyo.ac.jp

*1: 文教大学情報学部メディア表現学科

◎Key Words 生成 AI、初年次教育

1. はじめに

生成 AI の普及に伴い、学生の主体的な学びにどのように活かしていくべきかという議論が活発に行われている。一方で、生成 AI の仕組みや特徴に関心を持たないままの活用は、出力結果の盲信や安直な利用を招きかねない。

このような背景を受け、本報告では生成 AI 使用における不適切な出力をテーマとした初年次教育の実践例を紹介する。初年次向け授業の中で、社会における生成 AI の利用状況を踏まえた上で、どのような指示によって不適切な出力がなされるかを調査、発表を行なった。

授業における実践を通じて、あえて不適切な出力を行うことによって、生成 AI の仕組みや特徴に対して学生がどのような知見を得られるか検討した。さらに、大学初年次の段階において、学生が生成 AI のどのような出力を不適切と捉えるかを分析することで、顕在化していない不適切な出力にはどのようなものがあるかを捉え、今後の教育活用に向けて示唆を得たい。

2. 本取り組みの目的

本取り組みの目的は、大学初年次の学生が不適切な生成 AI の利用とはどのようなものだと捉えているかを明らかにすることである。私たちを取り巻く情報環境の多様性は、生成 AI 利用のあり方にもそのまま影響を及ぼしている。学生らの認識の理解なくして、生成 AI の学習活用に関する議論は進められないだろう。

この取り組みを通じて、学習者が自ら、適切な AI 利用について考える枠組みの検討につなげていきたい。

3. 対象

3.1 カリキュラムにおける位置付け

今回取り組みを行ったのは、神奈川県下の私立大学におけるメディア関連の学科に所属する 1 年生向け必修科目「アカデミック基礎演習」である。2026 年度は履修者 98 名（うち再履修 7 名）であり、履修者を 3 クラスに分け、3 教員が 5 回ずつ担当するオムニバス形式で運用をしている。科目名が表す通り、大学における学びの基礎を学習する内容で構成されている。

3.2 授業実施計画

アカデミック基礎演習の授業実施計画を表 1 に示す。全 15 回のうち、大学における学びの基礎として、「調べて書く」「統計データ読解」「データ収集」といったテーマによる演習型の授業として開講されている。

この授業の中で、筆者の担当する「統計データ読解」の 5 回では、「生成 AI における適切ではない出力の事例につ

いて」をテーマに据え、統計データの調べ方や読み解き方、ポスターによる発表の方法について学ぶ。

表 1 アカデミック基礎演習の授業実施計画

回	テーマ	内容
1		構想を立てる
2		調べる
3	調べて書く	書く
4		冊子に仕上げる
5		発表
6		個人のメディア利用
7		統計データ読解
8	統計データ読解	調査と分析
9		ポスター制作
10		発表
11		量的／質的研究
12		量的データ収集
13	データ収集	質的データ収集
14		データ収集の実施
15		発表

4. 授業内容と生成 AI に関する演習

筆者の担当する「統計データ読解」では、5 回を通じて「生成 AI における適切ではない出力の事例について」をテーマに演習に取り組む。

授業内容および演習について説明する。

- ① 身近なメディア利用を捉え直す
生成 AI の仕組みを説明した上で、自身の生成 AI 利用について説明する。
- ② 統計データから見るメディア利用
統計データの調べ方・読み解き方を理解し、生成 AI に関連する統計データを調べる。
- ③ 調査と分析
総務省による AI 利用リスクに関する調査^①を参考に、生成 AI による不適切な出力の例を学び、プロンプトを調査する。
- ④ ポスター制作
学術的発表形式としてのポスターの役割を学び、これまでの調査結果をポスターにまとめる。
- ⑤ 成果発表とレポート提出
クラス内でポスターセッションを行い、発表を通じた振り返りをレポートにまとめる。

5. 演習成果の検討

履修者の演習成果の検討については、3 クラスすべての

授業を終えた後に改めて分析を試みる予定である。本稿では、現時点で課題が提出された2クラス64人の集計結果を紹介する。

5.1 第一回：身近なメディア利用

生成AIの個人利用については、9割超の学生が利用しているという回答であった（図1）。

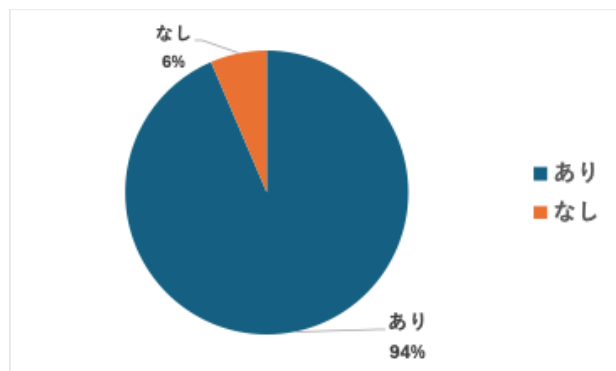


図1 生成AIの利用状況

続いて、生成AIの主な利用目的を図2に示す。最も多いのがレポートやメールなどの文章添削、次いで学習支援となった。学習支援については、受験勉強のための一問一答を作成してもらうなど、受験生の特徴が色濃く反映された。さらに、対人関係を中心とした相談、情報収集や生活支援、創作支援といった回答があった。情報収集については検索エンジンの代替としての利用、生活支援ではレシピ検索など日常に密着した気軽な相談を頻回で行う様子が窺えた。創作支援については、小説やゲームプログラミングの支援としての利用があった。

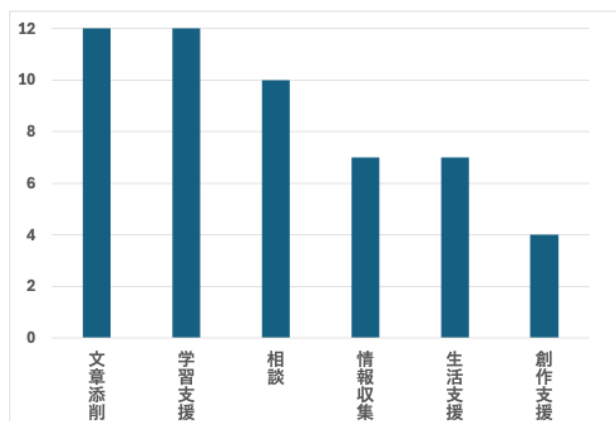


図2 生成AIの主な利用目的

5.2 第三回：プロンプト調査

生成AIが不適切な出力をするプロンプトの調査では、様々な事例が示された。ここでは、代表的な幾つかの例を紹介する。

まず、時事的な出来事を問うた際の間違ひに関する事例が多く示された。任意の学校の校長や学長の名に関する質問に対して過去のデータを示すといった間違ひが散見された。その亜種として、現在の日本の総理大臣について問うた際、氏名は正しくとも歴代数に間違ひが指摘された。

続いて、不適切な判断に基づく出力をする例として、死体の隠し場所や窃盗の行い方などの違法行為を助長する質問に対する応答が挙げられた。質問当初は生成AIによる回答が控えられたものの、ユーザの立場を警察官と偽ることで多くの回答が出力された。

さらに、フェイクや虚構の例として、任意の小説家の架空の作品名についてのあらすじ紹介を質問すると、存在しない作品に関する架空の内容が出力された。架空の作品名であったことを示されてもなお修正は行われなかった。

6. 考察と展望

本取り組み開始時、大学初年次の学生のほとんどが生成AIの間違ひに対してある程度のリテラシーを会得した状態にあった。「受験勉強中にいつの間にか架空の歴史用語の学習をしている状態になっていた」「試しに好きなアイドルのことを調べてみたら間違ひがあったので生成AI使用に慎重になった」といった声が聞こえる中での演習であったため、不適切な出力をするプロンプト調査の演習はスムーズに進められた。

一方で、学生によるプロンプト調査で得られた不適切な出力には、「差別や偏見の助長」あるいは「専門資格なしの断定」などの事例に乏しく、その意味で、学生が慣れ親しんだわかりやすい不適切な出力が多く挙げられたことが推測される。言い換えると、不適切とわかりづらい出力について、いかに学んでいくかが課題であるとも考えられる。

本取り組みでは、授業内で行われるポスターセッションを通じて、生成AIによる不適切な出力の事例に数多く接触する機会が設けられた。普段の個人的な生成AI利用では得られることの少ない他者の生成AI利用について知る機会は、ICTの学習活用という観点においても有益であると考えられる。今後も検討を重ねていきたい。

参考文献

- (1) 総務省：“国内外における最新の情報通信技術の研究開発及びデジタル活用の動向に関する調査研究の請負成果報告書”，
https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/linkdata/r07_02_houkou.pdf (2025)。